聖霊降臨後第２主日　（特定５）　2010/6/6

聖ルカ福音書第７章１１節 ～１７節

於：聖パウロ教会　司祭　山口千寿

「泣くな、泣かなくてよい。」イエスさまが一人息子を失ったやもめに向かって告げられた御言葉です。何という不思議なみ言葉でしょうか。わたしたちは不幸に見舞われた人に対して、果たして「泣くな」と言うことができるでしょうか。悲しみのどん底に投げ込まれて涙を流している人に向かって、「もう泣かなくてもよい」と言うとすれば、その根拠となるのは一体どんなことなのでしょうか。

悲嘆に暮れている人に、わたしたちが、もし慰めの言葉を語ることができるとしたら、それは、むしろ「思いっきり泣きなさい。涙が枯れるまで泣き通しなさい」という言葉ではないでしょうか。泣くことによって、多少は気持ちが楽になるかも知れないと思うからです。

今日の福音書の物語は、イエスさまの一行がナインという町に入って行こうとされた時のことです。町の門から一目でそれと分かる葬列が、町の外の墓地に向かって進んで行こうとしています。大勢の町の人が泣き声を上げながら棺に従って歩んできます。当時の葬儀は、亡くなったその日のうちの行われることになっていたと言いますから、このやもめは激しい衝撃のまっただ中にあったでしょう。うつろな目をして放心状態にあったことは想像に難くありません。おそらく、一人では歩くこともできないほどの、今にも倒れてしまうのではないかと思われるような姿であったでしょう。誰かに支えられて、やっと棺に寄り添うことができたのでしょう。

聖地旅行を経験したことのある方ならご存じだと思いますが、或いはエルサレムの町の写真をご覧になれば分かりますが、当時の町というのは城壁に囲まれていました。外敵から町を守るためです。昼間は、町の門が開かれていて、そこから出入りすることができました。町の外へ農作業などに出て行って、夜には扉を閉めて誰も入れないようにしていました。墓地は町の外にあります。エルサレムの町でも城壁の上からキドロンの谷を見下ろすと、そこには無数の墓が並んでいるのを目にすることができます。

生きている者は町の中、城壁の中で生活を営むのです。死者は外へと運び出されなければなりません。今や、城壁が母と息子の間を隔てようとしています。死が母親の手から無理矢理に息子を奪い取ろうとするのです。しかし、その野辺の送りの行列を誰も止めることはできないのです。イエスさまがこのやもめに「泣

くな」と声をかけられたその瞬間も、行列は進むことを止めなかったのです。

受け入れがたい現実、既に起こってしまった現実、この現実を神さまであっても変えることはできません。自然の法則に逆らって、自然の秩序を覆して奇跡が起こることを期待することはできません。だからこそ、わたしたちの悩みは大きくならざるを得ないのです。苦しみを簡単に乗り越えることはできないのです。

イエスさまがやもめに声をかけた理由は、この母親を見て憐れに思ったからです。ただそれだけの理由です。母親が嘆きを訴えたからではありません。母親の祈りに応えたからというのでもありません。周りの人々に、イエスさまが感心して称賛するような信仰があったためでもありません。ただ、そこにあるのは悲惨な現実、死という冷厳な事実だけです。

イエスさまはその女の不幸を「ご覧になった。」そして「憐れまれた」のです。断腸の想いに駆られたのです。はらわたがちぎれるほどに激しく心を動かされたのです。そしてイエスさまの方から「近づいて」行かれたのです。

この「憐れに思う」という言葉は、ルカ福音書では「善きサマリア人」のたとえに出て来る言葉でもあります（10：25ー）。強盗に襲われて瀕死の重傷を負った旅人を、一人のサマリア人が、「見て」、「憐れに思い」、「近寄って」、介抱したのです。

もう一つ、「放蕩息子」のたとえにも出てきます（15：11ー）。父親の財産を放蕩の限りを尽くして無駄遣いしてしまい、飢え死にしそうになってやっと我に返り、父親の元に帰ってきた下の息子を、父親はまだ遠く離れていたのに、「見つけて」、「憐れに思い」、「走り寄って」、抱きしめました。はらわたが締め付けられるほどに憐れに感じたからです。

ナインのやもめをご覧になったイエスさまも、やもめの悲惨さに心が動かされ、そして棺に近づいて手を触れられたのです。イエスさまが手をかけられたことによって、初めて葬列は墓場に向かう動きを止めたのです。誰にも止めることができなかった歩みが、イエスさまによって止められたのです。そこからもう、墓に向かって行くことが必要なくなったのです。

イエスさまは若者に声をかけられました。「起きなさい。」「すると死人は起き上がってものを言い始めた」とルカは記しています。ご自身、死の壁を突き抜けられた方であるからこそ、生と死の境を超えて向こう側に行ってしまった者にも、その声は届くのです。

パウロはローマの信徒への手紙の中で、「キリストが死に、そして生きたのは、死んだ人にも生きている人にも主となられるためです」と言っています（14：9）。

わたしたちは、この地上で生きている間、いろいろな主を持ちながら生きています。夫のことを主人と呼ぶのであれば、夫が主です。会社勤めをしている間は、社長が主人です。しかし、このような主は、わたしたちが死んでしまえば、それでもう主とは言えないのです。死の世界にまで力を及ぼすことはないのです。本当に主と呼ぶことのできる方がおられるとするならば、その方は死んだ者の主でなければならない。そうでなければ、この世だけの主であるならば、それはかりそめの主でしかありません。

イエスさまは、本当の主となるために、ゴルゴタの丘、即ちエルサレムの「門の外で苦難に遭われ」(ヘブライ 13：12)、「死者の中から引き上げられたのです」（同 13：20)。そのお方が、一人の名もないやもめの悲しみをご覧になったのです。はらわたがちぎれる想いをされたのです。母親以上に一人の若者が失われることに悲しみを感じられたのです。そして近寄って大きな出来事を起こされた。それは一人息子を母親にお返しになるためです。人間を絶望と悲嘆の中に投げ込む死と向かい合って、死の壁を打ち破られたのです。そうすることで母親を悲しみの海の中からすくい上げられたのです。

この出来事に人々は恐れを抱いて神さまを賛美して言いました。「神はその民を心にかけてくださった」と。フランシスコ会訳の聖書では、「神がその民を訪れてくださったのだ」と訳しています。イエスさまによって起こされた出来事は、神さまの訪れそのものであると言うのです。死というのは、わたしたちが神さまなどは、どこにもおられないと結論づけるよりほかに、最終的な判断を下すことのできないような現実です。その現実の中に神さまの救いが、今、ここに起こったといって賛美したのです。

洗礼者ヨハネの父親の祭司ザカリヤが、「高いところからあけぼのの光が我らを訪れる」と預言して歌ったその光、それはまた「暗闇と死の陰に座している者たちを照らす光」です（1：78, 79)。そのような光としてイエスさまは訪れてくださった。神の民を心にかけてくださったのです。

話は変わりますが、今から約３５年ほど前に、１人の若者が事故で亡くなりました。その若者はカーレーサーで、富士スピードウェイで競技中に車同士の接触事故が起こり、乗っていた車が炎に包まれて助かりませんでした。２５歳でした。ご両親のお気持ちはいかばかりであったのでしょうか。わたしの想像をはるかに超える衝撃と深い悲しみに襲われたことでありましょう。

その出来事から１０年を経て、ある機会を得て、お母さまが次のような短い文章を記されました。

「やがてキリストの日にさきに召された子に逢う喜びと感謝を思い、神によりたのみ今日を強く生きる」。そのように記されています。

「神によりたのみ今日を強く生きる」と、この方の生きる姿勢が表明されています。悲しみの中にへたり込んで、２度と立ち上がれないということではなくして、そこから再び立ち上がって、強く前向きに一日一日を生きていくという決意が示されています。

神さまを恨もうと思えば恨んでも恨みきれないような出来事であったと思います。それを、神さまを恨むのではなくて、返って神により頼むのだと言っています。何故、このようなことが言えるのでしょうか。復活を信じているからだと思います。「若者よ、起きなさい」という主のみ言葉がこの方の中にもこだまして鳴り響いて来たからだと思います。

「キリストの日に」とありますが、すべて者が神さまの前に申し開きをしなければならないその時が来たときに、ご自分は神さまの御心を受け入れて生きてきたと胸を張って神さまの前に申し述べることが出来る、そのような歩みをしていこう、していきたいと心から願っておられたのでしょう。

そのようにして、終わりの日の甦りの時に先に召された方と、喜びと感謝の内に相まみえる希望を抱いておられます。ご子息が先に行って待っていてくれるところに、やがてはご自分も行くのだ、行けるのだ、そしてそこで再び会えることを信じて、希望を天国に繋いで、与えられている日々を強く生きていくと、その信仰がこの文章には述べられていると思います。この方にとっては、天国が具体的な姿をもってイメージすることが出来ているのです。イメージするだけではなくて、その天国のイメージに支えられてその後の歩みが進められてきたのす。

このような文章は、本当に信じていなければ書けません。建前であったり、恰好だけつけるような気持であったなら、とてもこのような心の底から滲み出てくるような文章にはならなかったでしょう。この短い文章の中に、この方の信仰生活のすべてが余すところなく表現されていると思います。

イエスさまは、「もう泣かなくともよい」と言われました。「主であるわたしがここにいるではないか、だからもう泣く必要はない。泣くな」と言われたのです。この主であるお方、死さえもご自分の支配のもとに置かれる方によって、わたしたちもまた涙を拭われて、平和のうちに日々を送る者でありたいと思います。